

青梅市文化財ニュース

第 1 5 4 号

平成12年 8月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859)

馬 方

平成6年、郷土工芸技術調査で、市内では体験された方がほとんどいなくなっていた馬方について聴き取り調査を行った。輸送手段の返還が激しい中で貴重な職業なので紹介する。

昭和10年頃に馬方を始めた小曾木1丁目の市川孝助さんの話。

当時は手車で運搬をしていた時代で、馬1頭と1台の運送者の馬力なら4倍の荷物が運べるので小曾木、黒沢には大勢の馬方がいた。市川さんは馬が好きな上に、22歳から一年間乗馬隊に徴兵され、馬の扱いを覚えていた。そこで農閑期の現金収入を馬方に求めた。中古の運送車を飯能の鍛冶屋から15円で（新車は50円位した）、馬は飯能の馬喰^{ばくろ}から200円位で買った。買う時の注意点。馬の体型は休んでいる時に左右4本の脚を揃えてスッキリ立っているのが強い。色は無地の方が丈夫。馬は寒さには強く暑さに弱いので、皮が薄く（皮下脂肪が多いと暑さに弱い）、鼻の穴の小さいものを選ぶ。運搬する物は、材木、薪炭が主だが正月用の松葉（庭に敷く）、門松など頼まれれば何でも運んだ。行く先は東村山、立川が多かったが、遠くでは千住（北区）まで行ったこともある。1日1往復で、どんな遠方に行っても馬がいるので泊まれず、すぐに帰った。街道沿いのケヤキを目印に夜も歩いた。馬は一度歩いた道を覚えていて「馬の一つ覚え」という。賃料は、東村山、立川なら1把3銭の薪が80把位運べるので1日、2円40銭の収入になった（酒1升が1円、地下足袋1足が60銭位の物価だった）。距離によっても値段は変わった。また婚礼の荷物を運ぶ時は鞍を金銀で飾りご祝儀相場で貰えたし、初荷の時はどこでも手ぬぐいを貰った。運搬に出ている時の餌やりは4回、在宅時は3回。餌は、切り藁、麦ぬか、ふすま。特に切り藁は骨が丈夫になるので欠かせない。沸かした湯で餌を練る。水は飼葉桶にふんだんに入れ、好きなだけ飲ませる。在宅時は青草も与えるが、必ず先に水を飲ませてからにする。先に青葉を与えると水を飲まないの、水不足になり疝痛^{せんつう}という糞づまりの病気になる。ひどい時は死ぬこともある。馬の病気の日射病、伝染病にも気をつける。蹄叉腐乱^{ていさふらん}という脚の裏が傷ついて腐る病気もあるので掃除が大切だ。「馬事提要」^{ばじていよう}という馬の全てがわかる本を参考にしていた。5月半ばから7月半ばの約2ヶ月は、農繁期で馬方の仕事ができないので、商売の人を通して50円位で馬を貸し出していた。田圃^{でんぼ}の代掻き^{しろか}

に使われていたようで、やせて骨と皮になって帰ってくるので、暫く休ませて11月頃から馬方の仕事を始めた。当時は年に1回、馬の検査があった。戦時にいつでも徴用できるようにするため、実際2、3回徴用された。市川さん自身も昭和17年に応召され、除隊後トラックの出現で馬方を廃業した。役8年間の馬方業だった。馬方は「人馬一体」の言葉通り、大事に馬を育て、心を通わせながらの仕事だった。この後、輸送手段は車の時代へと急速に変化していくのである。

(文責 三好)